

平成 23 年 4 月 30 日現在

機関番号：32615
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19529005
 研究課題名（和文） オン・ゴーイング法とPAC分析法の活用による日本語教師の実践的思考の解明
 研究課題名（英文） A Study To Clarify Practical Thinking of Japanese Language Teachers By Applications of "On Going Method" and "Personal Attitude Construct Analysis"
 研究代表者：小澤 伊久美 (OZAWA IKUMI)
 国際基督教大学・教養学部・講師
 研究者番号：60296796

研究成果の概要（和文）：本研究では、新人日本語教師・経験日本語教師が日本語授業観察時に展開する実践的思考（授業に関する実践知を用いた思考）の解明を最終目標に、複数の手法による調査を実施した。具体的には教師に授業を見て感じたことを即興的に語ってもらって得たプロトコル、授業観察後のレポート、PAC分析法を活用したインタビュー、ビリーフ質問紙調査などを組み合わせ、新人・経験それぞれの傾向と各人の個性との分析を試みた。

研究成果の概要（英文）：How Japanese language teachers implement "practical thinking" (thinking based on practical knowledge of teaching activities) is an important topic but continues to be a difficult one to assess. This research is a series of investigations that attempt to assess such thinking based on four sets of data: (a) the oral comments of 4 novice teachers and 5 experienced teachers recorded when they did a "think aloud" while watching a video of a Japanese language lesson, (b) written reports that these same 9 teachers produced immediately after the video session, (c) interview datum taken from the 9 teachers individually by Personal Attitude Construct (PAC) analysis method, and (d) the same teachers' responses to a multiple choice questionnaire on teacher's beliefs. This research made clear how PAC analysis should be conducted when researchers apply it to this type of investigation, as well as how questionnaire should be made and used. The characteristics of teachers' beliefs among novice teachers and experienced teachers, as well as their individual characteristics, are still on analysis and will be presented to academic conferences and journals in the near future.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,500,000	570,000	3,070,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育、教師、実践的思考、PAC分析、ビリーフ、SEM（構造方程式モデリング）、プロトコル、新人教師と経験教師の比較

1. 研究開始当初の背景

日本語教育でも授業場面における実践的教授能力の解明や育成を目的とした授業分析や教師の内省の分析が盛んになったが、教師が実践場面で何をきっかけとしてどのように無意識的かつ即興的に判断しているかという思考は、従来の分析法では扱うことが出来なかった。

また、日本語教育では内省を通じた授業者自身の思考、つまり、教師個人の個別の思考の記述・分析が多いが、教科教育の分野で教師の熟達研究が明らかにしてきたように、教師は授業という固有の場面の文脈において思考しており、個別の例を基にした極端な一般化は危険であることを考えると、日本語教育界でこれまでに蓄積されてきた授業行動の原理に関する気付きや解釈は、個別の文脈を超えて共有できる知見にはなりにくいと言える。

教科教育の分野では、いくつかの研究が授業実践における教師の意思決定について多くの知見を蓄積してきている（吉崎 1991、佐藤他 1990、生田 1998）が、日本語教育においてはそのような研究は殆どなく、特に熟練教師の実践的思考（教授活動に関する実践知を用いた思考）をも取上げた研究は研究代表者らによるもの以外には未だなく、授業という固有の場面の文脈に即しつつ、個別の教師の思考の分析を越えて共有することが可能な実践的思考とは何かを探ることが、教師教育のためにも急務であると言える。

このような背景から研究代表者らは、佐藤他（1990）を参考に経験日本語教師と新人日本語教師の比較から両者の実践的思考を明らかにしようとしてきた（坪根・嶽肩・小澤 2006、小澤・嶽肩・坪根 2006）。これまでに、新人は即興場面では主に事実の指摘に留まり、教授法についての解釈や代案提示が出来ないものの、学生の様子から教授法へのフィードバックを得ようとしていること、経験教師は即興場面においても行為の目的や授業の文脈を踏まえて教授法の是非についての指摘や代案を提示していることがわかった。更に、新人が授業の中で重要度が高いものを必ずしも記述していないこと、観察後に全体を見渡して気づいた問題点や教師の立場を客観的に見たことによる気づきや異なる教授観等に対する価値判断の一時留保があることなどがわかった。

これを佐藤他（1990）などの調査と比べると、日本語教育固有の場面での実践的思考が分析出来ただけでなく、新人の思考が命題の量的には経験教師と差異がないという点で

研究結果に違いがあった。また、プロトコルとレポートを相互補完的に分析することで片方のみでは掴めなかった教師の思考が分析可能であること、プロトコルもレポートも決して被験者の授業全体に関する思考が網羅されて表現されているのではなく、ビリーフやその時に被験者の抱えている問題意識に影響を受けてフォーカスされた部分が出ている可能性が高いことなど、独自の考察も得られた。

しかし同時に、調査方法・分析方法には問題があることもわかったため、それらの課題を克服し、さらに丁寧な調査・分析が必要となっていた。

2. 研究の目的

最終目標は、新人日本語教師・経験日本語教師が日本語の授業を観察した際にどのような実践的思考（授業に関する実践知を用いた思考）を展開するのかを解明することであった。

また、教師の授業観察時の実践的思向を分析するための研究方法を確立することも目的の一つであった。

その上で、上述の実践的思考に関与する要因を特定し、実践的教授能力を育成するための理論や方法論を構築することも重要な狙いであった。

3. 研究の方法

大学で日本語を教えている新人教師（教歴1年未満）と経験教師（教歴20年以上）とを対象として、日本語の授業を観察した際に、どのような実践的思考を展開するのか、新人教師・経験教師というカテゴリー別に相違はあるのか、個々人の個性はどのように表れるのかという観点から調査した。

具体的な方法は以下の通りである。

（1）大学でなされた日本語授業を2台の固定カメラで撮影し、教師側・学生側の両方の映像をおさめたDVDを作成した。

（2）協力者である新人教師・経験教師に個別に授業を見てもらい、感じたことを視聴している場でそのまま即興的に語ってもらってプロトコルを得た。

（3）授業観察後に自由記述のレポートを執筆してもらった。

（4）PAC分析法を活用し、「よい日本語教師像」についてインタビューを実施した。

（5）研究者らが独自に作成したビリーフ質問紙調査に回答してもらった。

なお、5の質問紙調査については上記の（1）～（5）の調査全てに協力してもらった新人

教師・経験教師以外に、日本国内で日本語教育を実施している大学に所属する常勤・非常勤教員に回答を依頼し、量的調査を実施した。質問紙調査の結果は上述の協力者については様々なデータを活用した分析に際して活用するデータの一つとしたが、回答者全体の回答結果はSEM（構造方程式モデリング）を活用して因子間の因果関係を分析することも試みている。なお、質問紙調査の実施に先だって、パイロット調査を実施し、項目の妥当性などを検証している。

4. 研究成果

研究に着手してから、協力者に視聴してもらうビデオ映像の撮影法や、PAC分析の実施法（刺激語の選定、適切な統計処理の検討、インタビューの技術の習得など）について研究者側の準備を入念に実施した。また、質的データの取り扱いのみでなく、質問紙作成においてもパイロット調査を実施したり、SEMによる分析法を学んだりして、より適切な調査が実施できるよう準備に取り組んだ。

その過程で、研究着手当初には想定しておらず、かつ、先行研究でもほとんど触れて来られなかった各種の問題に直面し、それらへの対応策を検討することを余儀なくされた。具体的にはPAC分析にその統計処理手順が与える影響、それに付随して気付かされた教師のビリーフの複雑さや揺れの問題である。事例を丹念に分析しつつ問題点を整理し、対応策を検討する時間が必要だった。これは本研究の成果の妥当性や信頼性を考えた場合に必要不可欠であったので時間をかけた意味はあったと考える。また、その問題についての研究成果は学界にも研究論文や口頭発表の形で還元することができ、多くの研究者の関心と呼ぶ結果につながっている。PAC分析という手法が日本語教育の分野でも活用されることが年々増えていることを考えると、本研究がこれまでに出した成果は社会に貢献する内容になったと自負している。

また、そのような手法の精査を経て、複数の調査により新人教師・経験教師の実践的思考について様々なデータをより好ましい形で採取することができたが、分析結果を公開するには時間が足りず、これについては近く学会等で発表していきたいと考えている。

なお、教師の実践的思考解明のためのデータの一つとして質問紙調査を実施したが、このような目的の質問紙調査は既存のものにはなかったため、先行研究を参照しつつ研究者らが作成に取り組むことになった。パイロット調査、本調査ともに、この種の調査としては多数の回答者から協力を得ることができ、質問紙の妥当性、分析結果の汎用性も大きいことが期待される。残念ながら本研究期間中には因子間の因果関係を分析するには

時間が足りなかったが、現在分析中で、近い将来結果を広く公開したいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

- ① 丸山千歌、小澤伊久美、「ステレオタイプ的な読解教材に学習者の留学経験はいかに反応するかー日本語学習者に対するPAC分析法による縦断的研究からの示唆ー」、『日本語教育研究論集（中国華東師範大学出版社）』、1号、2011、印刷中、査読無
- ② 丸山千歌、小澤伊久美、「日本語教科書に見られるステレオタイプを日本語教師はどうとらえたかー多様な日本語学習者への実戦経験を持つ日本語教師へのパイロットスタディー」、『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』、18号、2011、33-52、査読有
- ③ 小澤伊久美、丸山千歌、「ある若手日本語教師の海外派遣前後の意識の変容」、『ICU日本語教育研究』、7号、2011、33-53、査読有
- ④ 丸山千歌、小澤伊久美、「日本語学習者と読解教材のインタラクションの解明に向けた縦断的調査ーPAC分析を研究手法としてー」、『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』17号、2010、101-133、査読有
- ⑤ 嶽肩志江、坪根由香里、小澤伊久美、「教師の実践的思考を深める上でのビリーフ質問紙調査の可能性と課題ー日本語教育における教師の実践的思考に関する研究(3)ー」、『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』16号、2009、37-56、査読有
- ⑥ 坪根由香里、嶽肩志江、小澤伊久美、「教師のビリーフ研究におけるPAC分析活用の可能性と留意点ーHALBAUとSPSSによる分析結果の相違についての考察からー」、『言語文化と日本語教育』38、お茶の水女子大学日本言語文化学会、2009、30-38、査読有
- ⑦ 小澤伊久美、丸山千歌、「PAC分析における好ましい統計処理とはーソフトウェアによってデンドログラムが相違する問題への対処のためにー」、『ICU日本語教育研究』、6号、ICU日本語教育研究センター、2009、27-47、査読有
- ⑧ 丸山千歌、小澤伊久美、「PAC分析におけるフェイスシートの開発に向けた課題ー日本語教材と学習者のインタラクションの解明に向けた研究のためにー」、『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』、15号、2008、3-19、査読有
- ⑨ 要弥由美、小澤伊久美、「統計は怖くない！ 図を見てわかる直感的統計分析 論文

理解のための構造方程式モデリング (SEM) 入門」、『日本語教育実践研究フォーラム報告』WEB版、2008年、11頁、査読有
<http://www.soc.nii.ac.jp/nkg/kenkvu/Forumhoukoku/kk-Forumhoukoku.html>

〔学会発表〕(計8件)

- ① 内藤哲雄、能智正博、丸山千歌、小澤伊久美、「PAC分析のデータを実施者・被検者・第三者が共に語り合うデータセッション」、PAC分析学会4回研究大会、2010年12月11日、横浜国立大学
- ② 坪根由香里、嶽肩志江、八田直美、小澤伊久美、「PAC分析と質問紙調査の併用によるノンネイティブ日本語教師のビリーフ研究—あるタイ人教師の事例より—」、PAC分析学会4回研究大会、2010年12月11日、横浜国立大学
- ③ 丸山千歌、小澤伊久美、「日本語学習者の経験は日本語読解教材に対する反応にいかにも表れるか—PAC分析法を用いた縦断的研究から—」、世界日本語教育大会、2010年7月31日、台湾国立政治大学
- ④ 坪根由香里、嶽肩志江、八田直美、小澤伊久美、「PAC分析によるタイ人新人・経験日本語教師の「いい日本語教師」像の比較」、世界日本語教育大会、2010年7月31日、台湾国立政治大学
- ⑤ 小澤伊久美、坪根由香里、「SPSSとHALBAUによるPAC分析インタビューの比較—デンドログラムの相違がインタビューに与える影響についての考察—」、PAC分析学会第3回研究大会、2009年12月19日、明治学院大学
- ⑥ 坪根由香里、小澤伊久美、「日本語教師のビリーフ調査へのPAC分析の活用について—先行研究とパイロット調査との比較から—」、PAC分析学会第2回研究大会、2008年12月6日、東邦大学
- ⑦ 要弥由美、小澤伊久美、「研究手法体験型ラウンドテーブル 統計は怖くない！ 図を見てわかる直感的統計分析 論文理解のための構造方程式モデリング (SEM) 入門」、2008年度日本語教育学会実践フォーラム、2008年8月3日(予稿集131-134頁)、早稲田大学東伏見キャンパス
- ⑧ 小澤伊久美、「日本語教師のビリーフ調査へのPAC分析の活用について—先行研究とパイロット調査との比較から—」、PAC分析学会第1回研究大会、2008年3月1日(抄録21-24頁)、和光大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小澤 伊久美 (OZAWA IKUMI)

国際基督教大学・教養学部・講師
研究者番号：60296796

(2) 研究分担者

坪根 由香里 (TSUBONE YUKARI)
大阪観光大学・観光学部・准教授
研究者番号：80327733
(H20→H21：連携研究者)

(3) 連携研究者

要 弥由美 (KANAME YAYUMI)
鹿児島大学・戦略的大学連携本部・
特任講師
研究者番号：90544445